
rEpl*i*cA

スイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r E p l i c A

【Nコード】

N 6 7 6 1 B

【作者名】

スイ

【あらすじ】

何かが自分を呼んでいる…少年、千の過去とその秘密とは。――
全ては、君の為に。平安ファンタジー。

序――預言――

小さな小さな村。

ふらりと現れた、瑛^{えい}と名乗る女が村に預言をした。

『月がいなくなる時。

小さな少年と、女が来る。

女はすぐ死に、少年は村を出ていくだろう。

2人は村に繁栄をもたらす神の子』

それきり、女は動かなかった。

村人は女の腹に赤子が宿っているのを見つけた。

赤子は成長し、少女になった。

少女は奇妙な力を持ち、不思議とその子もその孫も力を持っていた。

それが後の、大巫女である。

時は経ち――。

5代目大巫女・守揚^{すよう}から、若い村娘全員に呼び出しがかかった。

狭い部屋に、小柄の老婆とそれを取り巻く数十人の村娘が詰めこまれる。

全員が複雑そうな、暗い顔で守揚の一挙一動を見守っていた。

「贅^{えい}は……琴羽」

「――！！」

ぴくつ、と1番右端にいた少女が俯いていた顔を上げた。

「私が、生贄……私が……」

震える声で、自問自答するようにつぶやく。

「分かっておるな？」

今年で御百歳を迎えたとは思えないほど凜とした声に、琴羽は身の引き締まる思いで言葉を紡いだ。

「分かって、います。これは喜ばしいこと。私は、龍神様に選ばれ……」

言い終えないうちに琴羽は黙ってしまった。

声が震えてしまい続きが言えない自分への不甲斐なさに唇をぐつと噛みしめ、俯く。

「——顔をお上げ、琴羽」

守揚がぴしゃりと言った。琴羽の肩がぴくりと震える。

泣きたいのを堪えてなんとか顔をあげると、守揚は小さく頷き、生贄を捧げる『贄送り』の準備について淡々と説明し始めた。

琴羽は話が全く耳に入らなかった。

実は、瑛の預言にはまだ続きがあった。

『龍神の祠に、生贄を捧げよ。』

さすれば汝らの村、栄えるだろう——』

壺——千——

まさか皆の前で泣くわけにもいかず、琴羽は自分だけが知っている秘密の場所へ向かった。

村から数mの雑木林を進んだその先、小さな社があるのを、知っているのは琴羽だけだ。

息をはずませながら、何かを振り払うように無心で駆けぬける。

遠目に社が見えた。

（もうすぐだわ…）

しかし琴羽はふと、立ち止まった。

社の前に立ち、ただ一心に何かを見つめている少年——。

少年は、いまにも死んでしまふ、そんな儚げな雰囲気漂わせている。

（……千…どうして…）

少年の名は、千と言った。いや正確にいうと、彼の名は誰も知らない。

少年は喋らなかった。

3年前——。

新月の夜、琴羽の村に一人の男の子を連れた女が来た。

2人の服はあちこち破れ薄汚れていたものの、着ていた物はかなりの上等な服。

村人は流刑——当時、罪人は遠隔の地や離れ島に追いやられていた——された貴族と考え、関わらないほうが良いと受け入れなかった。しかし、預言を知るただ一人の大巫女、守楊が2人を村でかくまう

事にしたのだ。

生活していくうえで呼び名がないと不便だから、と守楊がつけた名前。

それが、千だった。

琴羽は千に全てを話したい衝動に駆られた。

恐いの。

もっと、生きたい。

ばば様は、何故あんなに平然としていられるの？
辛くないのかしら――？

もし、こんなこと村の者に言いでもしたら皆琴羽を軽蔑するだろう。
村の為だというのに、嫌がるなんてもつてのほかなのだから。

でも、千ならただ黙って聞いてくれる。

千は相槌こそ打たないが、村の者に告げ口することは絶対にしない
だろう。琴羽にはそんな確信があった。

つまり千は優しいのではなく、興味がないのだ。

この村がどうなろうと。

琴羽がいけにえになろうと。

それは千にとつて、ただ過ぎていくだけの日常。

それでもよかった。

誰かに聞いてほしかった。

誘われるように、琴羽は一步一步千に近付く。

「せ――」

「千」と言おうとしたのだが。それは野太い声に重なって掻き消された。

「千――」

呼ばれ、千が振り向く。

琴羽は慌てて草陰に隠れた。一瞬、千と目が合った気がしたのはただの気のせいだろうか。

だが訝しげるのもつかの間、すぐに琴羽の顔が真っ青になった。

（私、今、なんてことを――）

琴羽は、村を裏切ろうとした。未遂でも、心持ちに変わりはない。

（バレないから愚痴を言うなんて、そこらへんの子供と変わらないわ！）

信じられなかった。

自分が、自分ではない何かに侵されていく気がした。

自己嫌悪しながら、帰路をとぼとぼ歩いていく。

ふと1年前、友達の一葉ひつめが生贄ひつねになった事を思い出す。

『どうしよう、私…私………怖い……』

そう縋り恐がる友達に、琴羽はこう言った。

『一葉！何を言ってるの？ねえ、あなた名誉なのよ……？』

その時の、一葉の傷ついた顔。

何かを呟いていたのだが、声が小さすぎて聞き取れなかった。今は分かる。

きつと、こう言っていた。

友達だと思ったのに、と。

一葉の声までよみがえり、頭の中で幾度も幾度も反芻する。

「名誉なんだから……か。私最低ね」

自嘲するように笑う琴羽の前に、大きい影が立ちふさがった。顔をあげると、よく見知った少年がいた。

「少し、話がある」

「今そんな場合じゃ…」

「いいから」

強引に言われ、琴羽は口をつぐんだ。

「——琴羽が。いけにえになる、って聞いて…これだけは、言っておきたくて。…俺、琴羽が好きだ」

今まで自分は最低だと思っていたのに。

この目の前の少年は、自分が好きだと言う。

それが、なんだかおかしくて。

「——ありがとう」

気が付けば、そう呟いていた。

「……うん」

少年は満足げに、言って頷いた。

式——贅——

村に戻ると、一人の少女がばたばたと走ってくるのが見えた。

（慰められるのかしら…）

琴羽は、ただ漠然とそう思っていた。

思ってもいない、うわべだけの慰め。

それが自分を、どんなに惨めにさせるか。

「琴羽、どこ行つてたの？」

息をきらせながら、きつい調子で少女が尋ねる。

「…ええと」

適当にごまかして、その場をのがれようとした時——

「あのね、大変よ！千が、いけにえになるって言ひ出したの！！」

興奮した様子で、少女が言った。

（千が——！？）

琴羽は信じられない思いで少女を見つめる。

「たぶん、雄太が…」

少女は、言いにくそうに語尾を濁した。

その言葉に、はっと先程の場面が頭をよぎる。

『千』

千を呼び掛けたのは、雄太だったのだ。

雄大は村の少年らをまとめている、いわゆるガキ大将的存在だった。

千をよく思つてはいなく、いつもなにかと突っ掛かっていたのを、

琴羽は思い出す。

いけにえも、千も、雄大も。

なにもかもが、勝手に進む。

今の琴羽は、自分の知らない内に、歯車が動き出した——そんな感じだった。

たまらなく齒痒くて、唇を噛み締める。

「今、どこにいるの？」

琴羽が問い詰めると、少女は逡巡したのち村の真ん中、赤い木を指差した。

「——ばば様のところよ」

守揚の家は少し特殊で、守り樹もじぎと呼ばれる大きな神木の中にある。その守り樹の下に、体格の良い青年がいた。

琴羽は一目で雄大だと分かり、怒りの表情をあらわにしながら近付いていく。

雄大はすぐに琴羽に気付いた。

「——琴羽。一体、どこに居たんだ？探してたのに……」

心配そうに言う雄大の言葉を、琴羽は無情にもはねつけた。

「私の事はどうでもいいわ。千に、いけにえになれって言ったの？」
嘘だと、信じたかった。

雄大は昔からの、幼なじみであり友達でもあったのだ。

「……」

沈黙は肯定の証と取って、琴羽は一方的に言い募った。

「千は男よ？どうしてそんなこと……！千も千だわ！全部、私を無視して——！」

それは半分、八つ当たりになかった。

全てに、対しての。

「琴羽の為に、二人で話し合ったんだ」

おろおろと、言い訳するように雄大が言う。

初めて、琴羽の目に怒りではなく戸惑いの色が浮かんだ。

「私、の……？」

（私の為に、千がいけにえになるっていうの？）

——嬉しかった。

人に、もちろん琴羽にだって興味がない、あの千が、
琴羽の為に、いけにえになるという。

だが。千は男で。

そんな事を、守揚が許すはずはなかった。

雄大を押しつけ、琴羽は木に近付いて話し掛ける。

「——守楊様。琴羽です」

しばらくして、凜とした声がかえってきた。

「少し、外で待っておれ」

「そんな、守楊様。その話私には関係があ……」

「——琴羽」

ぴしゃりと言われ、琴羽は仕方なく引き下がった。

数時間後。

守揚が、一人で出てきた。

周囲には騒ぎを聞き付けた村人でいっぱいだった。

ざわつく村人を、守揚お付きの若い巫女が黙るように合図する。

守揚はゆつくりと口を開いた。

「贄は——琴羽のまま。千は私の部屋に閉じ込め、厳しく反省させる。よいな？ 琴羽」

守揚の目がぎょろりと動き、琴羽を捕らえる。

琴羽は口をきゅつと真一文字に結び、頷いた。

「では、皆も仕事に戻れ。……雄太、おぬしには少し用がある」

うなだれる雄大を囲むように、数人の青年が現れた。

「守楊様、俺達はっ」

「関係したものは、全て来なさい」

微かにため息をつき、守揚が歳を感じさせる弱々しい声で言った。

参 — 2人の贅 —

少女は、鏡を見てため息をついた。
鏡にはきらびやかな服を身につけ、化粧をした美しい少女が写っている。

だが少女の顔は、衣装とは対照的に曇っていた。

「琴羽。顔をこちらにお向け」

守揚の声に、少女——琴羽がゆっくりと振り向く。

琴羽の強張った様子に、守揚は眉をひそめた。

「…何を、怖がっておる」

軽蔑のまなざしを受け、琴羽はぎくりとした。

同時に、憎しみが沸き上がる。

守揚が琴羽を、贅と決めなければ。

死なずにすんだ。

怖がるなんて、当たり前なのに。

今すぐ、走って逃げたかった。

泣きわめいて、はつきり死ぬのは嫌だと叫びたかった。

ふと、一葉を思い出す。

（一葉は…こんな気持ちだったんだわ……）

琴羽はふっと力を抜いた。

深く息を吸いながら、守揚を見据える。

一葉が力をくれる気がした。

名誉なんだから。

せめて村の為に死ぬ事を、誇りとして。

（私は、死ぬ——）

「何も。怖くなど、ありません」

長い沈黙。

破ったのは、守揚だった。

「……じき、準備が終わる。行きなさい」

守揚は踵を返し、奥へと消えていった。

午前、零時。

大きな白い神輿を、男4人が担いで闇夜を駆け抜ける。

あるのは木の軋む音と、男達の僅かな息遣い。

（もうすぐだわ…）

琴羽は神輿の中で揺られながら、ひっそりとため息をついた。

ギィィ…ガタン！

神輿が急に止まり、中にいた琴羽は頭をぶつけそうになる。

文句を言おうと外に顔を出すと、後ろに手を引かれた。

「誰っ」

振り向くと、いたのは琴羽と同じような衣装に身を包んだ美しい少女。

何か言おうと口をばくばくさせるが、声が出ない。

「あなた——」

やっとのことで声を絞り出すも、少女に鋭く遮られた。

「黙って。気付かれたら困る」

中性的な声。高くもなく、低くもない。

とそこで、がたん、と再び神輿が動き出した。

反動で、琴羽は思わず少女にしがみつく。ふわりと撫子の香りがした。

「君の代わりに、私が贄になる。だから逃げて」

静かに囁かれ、しかし琴羽はゆつくりと力なく首を振った。

「駄目よ、逃げる暇なんてない…」

「大丈夫。私が合図する。村には戻れないけど…三里先に村があるから、そこに行きなさい」

「あなたは誰？何故、私を助けてくれるの？」

少女の瞳が微かに揺れた。ふっと目を伏せる。

「…分からない。けれど、何かが私を呼んでいるから」

「でも。私の代わりに貴方がいけにえになるなんて…」

「私は死なない」

戒めるような、少女の強い口調に琴羽は自嘲した。

「——そうね。精神だけとなって、神の元へ行くの」

少女は、返事をしなかった。

かわりに、しっと人差し指を琴羽の唇に当てる。

琴羽は視線だけで問うものの、少女は視線をくれなかった。

「二人の贄よ。速やかに出て来られるがよい。我は龍神様の使いなり」

朗々とした声が響いた。

人のものではない、不思議な声。

琴羽は思わず服女の子の裾を掴んだ。

「いけにえは私一人。この子はただの人だ」

少女が、凜と答える。

「龍神様は二人、と申された」

「私だけでは駄目か？」

「それは私の決めることではない。早くしろ」

微かに苛ついた使いの様子に、少女はとうとう立ち上がった。

琴羽は震えながら、少女にしがみつく。

「いや。一人にしないで…」

「——来るの？」

少女が怪訝そうに首を傾げる。

琴羽が強く頷くと、少女は懷から包みを差出した。

「いざとなったら、使いなさい。それまでは私が守る」

渡されたのは、鋭く光る短刀。柄には不思議な紋様が描かれている。高価な物だと、一目で分かるような代物だった。

琴羽は、少女に連れられゆつくりと神輿から降りた。

外にいたのは、鹿が一匹。

神輿を運んでいたはずの男達がどこにもいなかった。

（——！どうして……！？）

思わず立ちつくす琴羽の手首を強く引き、少女は鹿の前まで急いだ。

「使いは貴方か。案内してくれ」

少女の言葉が分かったかのように、鹿はさらなる奥地へと歩き出した。

肆 ―洞窟―（前書き）

少々グロテスクな部分がありますので、お気をつけ下さいませ。

肆——洞窟——

しばらくして、小さな洞窟についた。

（こんな所があったなんて。知らなかった…）

ふと隣を見ると、少女は空を見上げていた。

琴羽もつられて、上を向く。

——綺麗な、半月。

「今夜は…境日さかえひなんだわ」

琴羽は呆然と呟いた。

贅送りは、境日——つまり満月と新月の境、半月に行われる。

当たり前の事なのに、琴羽はすっかり忘れていた。

（一葉も見たのかしら…この、半月を——）

琴羽は地に膝をついて祈った。

どうか。

あの子を、助けて。

少女は、身代わりになると言った。
けど。

琴羽は、やはりそれを許せなかった。

だから少女についてきたのだ。

今言っても、少女は聞かないだろうから。
最後の最後で琴羽が贅へと代わる為に。

ぐい、と琴羽は手首を掴まれ顔を上げた。
冷たく、滑らかな白い手。

「時間がない。急ごう」

案外少女の力が強いことに驚きながらも、琴羽は素直に従った。少女はろうそくを片手に、すたすたと歩き出した。

洞窟は真っ黒だった。

おーん、おーん、と何かの叫び声が反響している。

唯一の明り、ろうそくは少女の手元を頼りなく照らしているだけ。

琴羽は、本当の恐怖を感じた。

——ドン！

急に少女に押し倒され、琴羽は打ち付けた背中 of 痛さに顔をしかめる。

目を開けると、スッと何かが被さった。

それは、少女の手。

「動かないで。そのまま目を、閉じなさい。見てはいけない。——剣を」

琴羽が目をつむったまま先程貰った剣を差し出すと、少女が受け取った気配がした。

覆い被さっていた少女の手のぬくもりが消える。

——何かが、いる。

少女の他に、何かが息づいている。

琴羽はぎゅっと目を閉じた。

「行け」

冷やかな少女の声が聞こえる。

ぐるる、と何かが唸った。

その時。

「走れっ」

強引に少女に腕を引かれ、琴羽はおぼつかないながらも走り出した。あの、おそらく何かがいるであろう方に向かって。

「危な…！」

スツと琴羽の目が再び手で覆われた。

「見ては、駄目」

刹那。

ピチャ。

肌に、何かが飛んだ。

「――」

呆然としながらも、琴羽は引かれるままに走った。

奥に進むにつれ、洞窟内は灯りがいらぬほど明るくなっていった。と、そこで少女がぴたりと止まる。

「どうしたの…？」

行き止まりかと不思議に思い、尋ねると。

少女はある一点を見つめていた。

その視線の先には、床にあぐらをかき、ゆったりとくつろいでいる男。

男は銀髪に白い肌、異国の服を身につけていた。

「龍神は、お前か」

少女は、凜とした口調で言った。

男が口の端を軽くあげる。

「貴様…男ではないか？面白い。俺が女だけでは物足りぬと？」
その言葉に、琴羽は一瞬耳を疑った。

（おと…ここ？）

そっと少女の顔を窺うが、相変わらず無表情なのでよく分からない。

まさか。

そんな、はずは。

だって。

だって——本当に？

琴羽が混乱していると、少女は息を吐き目を伏せた。

「村を出たかった。何かが私を呼び続けている」

相変わらず訳が分からない琴羽を尻目に、男はほっ、と唸り目を細める。

「貴様、名は？」

「……」

何も言おうとしない少女に、男はふんと笑った。

薄く笑みを浮かべたまま、ぱちん、と指を鳴らす。

その瞬間、琴羽はふっと意識を失い床に崩れ落ちた。

伍 ― 帝の子 ―

「名を」

再び、男が静かに問う。

少女は長い沈黙の末、口を開いた。

「千」

少女は、そう――紛れも無く、あの千だった。

数日前。

雄太が、千に言った。

『お前、村を出たいんだろう。琴羽の代わりに生贄になれよ』

何故、しっているのだろうと千はぼんやり思った。

『生贄？』

『俺が出させてやる。生贄として。お前はそこから、逃げればいい』

『――分かった』

こくんと頷く。

琴羽という少女の顔もわからないのに。

雄太は信用できないのに。

自分が何故、そう答えたのか。

千はよく分からなかった。

ただ、出られるならば。

それもいい、と思った。

男は一瞬不満そうな顔を見せたが、すぐにせせら笑った。

「あくまで言う気はないと？……が、俺には分かる。貴様、帝の子だな？……帝の子息が何故こんな辺鄙な土地へ？」

「聞かなくても分かっているのに、聞くのか」

千はあくまで冷静だった。

父はもう、いないのだ。

あれを父とは、認めない――。

「なるほど。確かに俺にはお前が隠したくとも全てが分かっている。が、聞くのだ。訳などない。あえて言うならば、暇だからだ」
「暇だから？ 悪いが私には自分の過去をおもしろおかしく話す趣味はない」

男の瞳が鋭さを増した。

「口に気をつける。その気になれば貴様など一飲みで十分……」

剣が、男の喉に押し当てらる。

一瞬だった。

男は微動だにせず、すまし顔で剣の切っ先を指で突いた。
剣がひゅん、と吹っ飛び壁に突き刺さる。

「――今日は、半月か。もうそろそろだな」

唐突に、男が呟いた。

「……」

それに呼応するように、ゆっくりと千は目を閉じた。

「――知らぬか？ 昔、お前の父親もここへ来たぞ。泉を連れてな」
千は目を開いた。

先ほどとはまるで別人のように、頼りなさげに瞳が揺れている。

「帝がこんな所に来る訳がない。もし本当に来てたなら――ただの……気まぐれだ」

「会いたいのか？ 白羽に？」

男が尋ねると、千はゆっくり首を横に振った。

「僕を呼んでるのは、もっと大きなものだ。帝じゃない」

「息子として、だ。会いたいとは思わないのか？」

「今更のこのこ出て来られても帝は困るだけだよ」

ゆらりと男が優雅に立ち上がった。

「ちようどいい。この祠に籠りっぱなしもそろそろ飽いたのだ。帝へ会いにゆくぞ」

えつと声を上げ、千は慌てて後ずさる。

「僕も？ そんな、嫌だよ」

おどおどした千に男は片眉を吊り上げた。

「早くしろ。グズは嫌いだ」

「帝には会いたくないんだ」

「お前は着いてくるだけでよいのだ。服も用意してある」
「ぱちん、と男が指を鳴らす。」

と、千の服が一変して優美な五衣になった。

「これ… 皇太子の——」

「気に入ったか。行くぞ」

絶句する千を尻目に、男はすたすたと歩きだした。

「ち、ちよつと待つてよ。行くなんて一言も」

「お前を呼んでいる者の正体がかかるかもしれぬのだぞ」
「まだこれ以上文句があるなら、殺す。」

男の、顔がそう物語っていた。

千は諦めたようにうなだれる。

「…分かったよ。だけど少し待つてて」

言い、まだ眠る琴羽の頬をぺちぺち叩く。

男は不思議そうに首をかしげた。

さらりと長い銀髪が流れるように垂れる。

「その娘も連れていくのか？」

「行き道途中の村にでも置いて行くよ。もうあの村には帰れないから。—— 掟なんだ」

千はふつと顔を曇らせた。

琴羽は、もう別の人間として生きていくことになる。

「掟、か。人間は面倒だな」

「あなたが人間を食べたのが始まりなんだからね」

千が睨みつけると、男はふんと笑った。

「お前は勘違いしているぞ？人間なぞマズくて食べぬわ」

「えっ。じゃあ、今までのいけにえは…」

「血だけ飲んで他の動物に食わせた。血は、うまいからな」

しれっと言う男に、千はやな予感がして琴羽の身体に覆い被さる。

「我慢して。この子は駄目だ」

「何故だ？いけにえなのだからよかろう。俺は腹が減っておるのだ」
やっぱり、と内心ため息をつく。

まあこの龍神に慈悲があつたら少女達が帰ってこないはずがないのだが。

「なら僕のを飲めばいい。男女は関係ないんだろ」

「まあ、いいだろう」

男は千の首に顔を近づけた。

ちく、と首筋に痛みが走る。

ドクン。

心臓が、跳ねた。

「——っ！」

千は床にしゃがみ心臓を押さえた。

めまいがする。

「何、を…！？」

「俺の血を入れた。数時間は副作用で身体が言うことを聞かないだろう」

男が淡々と告げた。

千を助けようともせず、見下したままで。

「何…で、そんなこと、……早…く…っ。村の人が……この子、を」
いい終えぬうちに、千は気を失った。

陸――旅――

身体がずっと揺れている。それは規則的な動きで、上下に揺れているだけのもの。

――何だろうこれは。

睡魔と戦いながらも必死に頭を働かせ、千はようやく自分が背負われていることに気がついた。

「千。気付いたか」

くるりと振り向かれ、突如目前に端正な顔が現れた千は混乱した。

「誰……？僕は、何を……」

「お前が早くと言うから急いで来たのだ。帝の所まであと数十里ほど」

覚えてないのか、と不満そうに眉をしかめて前を向く。

その、独特な話し方は。

（銀の……髪？……帝……って、）

「ああ、思い出した。でも何で僕が背負われ……そうだ血だ！」

やっと全ての記憶が戻り理解した千は、背負われながら男の肩を揺さぶった。

「何であんなことしたんだ！血を飲んでいいとは言ったけど、入れているなんか言ってない！！」

血を入れられただけで気を失うなんて、普通ではあり得ない。

何かをされたんだ、と千は確信していた。

「言っておくが、これは俺の意思ではないぞ。飲んだ時少し混ざるのは仕方のないこと。それより」

男は隣を見ろという風に顎をしゃくった。

「この娘はどうするのだ」

「え……？」

つられて見ると、いたのは千と同じく背負われた少女。

背負っていたのは、生贄である二人を迎えに来た、あの時の鹿だった。

前より巨大化しているのは気のせいだろう。

千は文句を言う気も失せ、ため息をついた。

「さっき言ったじゃないか。行き道の村に置いていく、って」

男はまだ何か言おうと口を開いたが、異変に気付き立ち止まった。視線の先には、ゆっくりと身動きをする琴羽。

鹿は器用に身をかがめ、琴羽を地面に横たわらせた。

「起きたか」

「みたいだね。——もういいよ、降ろして」

相手のせいとはいえ今まで背負ってもらった礼を言い、千は琴羽に駆け寄った。

まだぼーっとしてる琴羽の顔を覗き込む。

「ええと…琴羽だっけ。大丈夫？今君は…」

「——っ！」

叫ばれる、と千は瞬間的に感じた。

慌てて顔をしりぞける。

だが、肝心な悲鳴がいつまでたってもやってこない。

琴羽はというと、喉を抑えながら瞳に困惑の色を浮かべていた。まさかと思い千は後ろに控える人物を振り仰ぎ睨む。

「…何したの？」

「騒がれると困るからな。一時的に声を取っただけだ」
「どうやら男に悪気はないらしい。」

（あのねえ…）

千は呆れて、返す言葉も無かった。

「いくら龍神だからって、むやみやたらにそーゆう事しちゃ駄目だ
って。戻してあげて」

たしなめる様に諭すと、男は琴羽をちらと見た。

「もう騒がないか？」

こくこく必死に頷く琴羽。目には涙が浮かんでいる。

あーあ、と千は頭を抱えた。

面倒くさそうに男が指を鳴らすと同時に、琴羽は恐怖でふらりと床に倒れこんだ。

「あつ。また気絶しちゃった……。貴方のせいだよ！」

「起こすか？」

「……できるの？」

「出来ないこともないぞ」

尊大に言う口元には、微かに笑みが浮かんでいる。

「いい。もういいよ。何もしないで。とりあえず村をさがそう」

強制的に話を終わらせ、千は歩き出した。

「失礼な。俺は善意で言ったのだ」

男が不満げに言うのを、無視して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761b/>

rEpl i c A

2010年11月16日08時27分発行